韓國語版『雪國』

－ 翻譯の<聽覺>表現を中心に －

金 順 熙*

目　次

一. はじめに
二.「金切聲」と「女の金切聲」
三.「さん」と「ちやん」
四. おわりに

一. はじめに

韓國と日本は同じ漢字文化圈に屬し、兩者は語順も似ているため、韓國では日本語に興味を持つ人は多い。がしかし、同じ漢字語を使用してはいるものの發音や同一語の意味には差異がある。そこで翻譯本の問題点の一つとして指摘されるのが、讀者が目にする韓國語版が原作にそった形で翻譯されているかどうかという点である。それらのことを比較・檢討し、指摘する人 は今日ほぼ皆無なのが現狀である。

本論では、數多い日本文學の翻譯本の中で、これまで絶え間なく刊行されてきた川端作品の魅力を翻譯の問題点とともに檢討したい。川端康成の『雪國』1)が韓國の讀者に讀まれるようになったのは、ノーベル文學賞を受賞した一九六八年からであった。韓國の國會図書館と國立中央図書館に所藏されている資料によると、韓國語版『雪國』は七十一種類も刊行されているのであるが、翻譯者によってその言葉の表現はさまざまであり、なかには內容の誤りだけでなく削除も目に付く。翻譯の問題点の一つは、讀者が目にする韓國語版『雪國』が內容通りに翻譯されているかどうかなのであろう。韓國語版『雪國』の翻譯の問題点の中でも、特に<聽覺>表現2)に關して考えてみたい。韓國語と日本語は語順が似ているためか韓國語にない單語以外には作品の內容を変えるような譯は見當たらない。しかし、部分的な譯の間違いや譯を補った

＊동의대학교 강사 일본근・현대문학
1)『雪國』の本文引用はすべて『川端康成全集 第十卷』(新潮社、1980.4刊)
2) 音、聲などを含むことにする。

譯の問題があるので、それらのことを韓國の釜山廣域市市立図書館に所藏されている翻譯書二十冊3)を對象とした。なお、今後、筆者を含めた外國人が文學作品の翻譯作業に携る際の留意点としたい。

二.「金切聲」と「女の金切聲」

まず、ここでは、表—1に示した「金切聲」と「女の金切聲」の譯をみることにする。

表ー1

『雪國』	出版年度	「金切聲」
①김 용제譯	1961.2.30	금속성 높은 음성
②박 경용譯	1968.10.25	금속성의 높은 음성
③고 우영譯	1968.10.25	날카로운 금속성 목소리
④김 세환譯	1969.月日無い	날카로운 소리
⑤김 소운譯	1970.1.10	커다란 목청
⑥이 육정譯	1979.月日無い	날카로운 소리
⑦이 원용譯	1981.4.15	금속성 음향
⑧강　민譯	1982.2.15	날카로운 음성
⑨하 근찬譯	1983.11.15	날카로운 목소리
⑩도서출판 靑化譯	1984.2.28	금속성 높은 음성
⑪맹 후빈譯	1986.9.20	날카로운 소리
⑫반 광식譯	1993.8	날카로운 외마디 소리
⑬한 영순譯	1993.7.1	커다란 목소리
⑭장 경룡譯	1999.9.10	날카로운 외마디 소리
⑮김 진욱譯	1999.12.20	날카로운 소리
⑯유 승휴譯	2001.4.30	큰 목소리
⑰다락원출판부譯	2001.9.1	째지는 소리
⑱유 숙자譯	2002.1.23	높고 날카로운 목소리
⑲김 채수譯	2002.2.22	째지는 소리
⑳서 기원譯	2002.8.30	새된 목소리

※(表にある①～⑳は、出版年度順に示した翻譯書につけた番号である。以下この番号で記す。韓國語譯には< >を用いて、原文には「 」を用いる。)

3) 本文末に示してある。

雪國への一回目の訪問の時、駒子の島村に對する切實な思いは、「島村さあん、島村さあん」と二回に伸ばして呼んでいる聲に表現されている。その「甲高く呼んだ」駒子の呼び聲は、「金切聲」だと原文にある。この韓國語の譯は、五つのパターンにわけることが出來る。

第一のパターン、<금속성 높은 음성　金屬性高い音聲>
：①・②・⑩(三例)。
<금속성 음향　金屬性音響>
：⑦(一例)。
<날카로운 금속성 소리　鋭い金屬性音>
：③(一例)。

第二のパターン、<날카로운 소리(음성)　鋭い音(聲)>
：④・⑥・⑧・⑨・⑪・⑮(六例)。
<높고 날카로운 목소리　鋭い聲>
：⑱(一例)。
<날카로운 외마디 소리　鋭い一聲>
：⑫・⑭(二例)。

第三のパターン、<큰(커다란) 목소리　大きい(な)聲>
：⑤・⑬・⑯(三例)。

第四のパターン、<째지는 목소리　裂ける聲>
：⑰・⑲(二例)。

第五のパターン、<새된 목소리　甲高い聲>
：⑳(一例)。

以上のことから、第一のパターンにある<금속성 金屬性>と第三のパターンにある<큰(커다란) 大きい(な)聲>は原文の意味とは違うのではないかと思う。日本語の「金切聲」というのは、「金屬を切るとき出る音のように鋭くかん高い聲」4)を意味する言葉なのに、ただ<금속성 金屬性>と譯してしまうと駒子の聲が持つ特徵が表現されてないことになる。

それに<큰(커다란) 大きい(な)聲>というのも原文がもっている情景が消されてしまうのではなかろうか。なぜならば、この場面において駒子の聲というのは、醉っていながらも島村を求めている切實な思いが込められているからである。さらに、日本語の「聲」に對して、原文同樣の<목소리 聲>(①・②・⑤・⑧・⑨・⑩・⑫・⑬・⑭・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳)と譯しているのが十四例と<소리 音>(③・④・⑥・⑦・⑪・⑮)と譯しているのが六例ある。表ー2にあるように「女の金切聲」が使われているところがあるが、そこではどのように譯されているかをみよう。

島村の雪國への三回目の訪問は、宿も紅葉見の客で賑わっている季節であった。島村が

4) 言葉の意味は『日本國語大辭典　第五卷』(2000～2001)による。p.29

泊っている宿の宴會に駒子は出ているし、葉子はその手伝いに來て

表ー2

『雪國』	出版年度	「女の金切聲」
①김 용제譯	1961.2.30	여자의 높은 노랫소리
②박 경용譯	1968.10.25	여자의 높은 노랫소리
③고 우영譯	1968.10.25	여자의 높은 노랫가락
④김 세환譯	1969.月日無い	여자의 금속성
⑤김 소운譯	1970.1.10	여자들의 새된 소리
⑥이 육정譯	1979.月日無い	여자의 금속성
⑦이 원용譯	1981.4.15	여자들의 높은 노래소리
⑧강　민譯	1982.2.15	여자의 높은 노래소리
⑨하 근찬譯	1983.11.15	여자의 날카로운 목소리
⑩도서출판 青化譯	1984.2.28	여자의 높은 노랫소리
⑪맹 후빈譯	1986.9.20	여자의 날카로운 쇳소리
⑫반 광식譯	1993.8	여자들의 톤 높은 목소리
⑬한 영순譯	1993.7.1	여자들의 새된 목소리
⑭장 경룡譯	1999.9.10	여자의 째지는 듯한 새된 목소리
⑮김 진욱譯	1999.12.20	여자의 날카로운 목소리
⑯유 승휴譯	2001.4.30	여자들의 고성
⑰다락원출판부譯	2001.9.1	여자의 날카로운 목소리
⑱유 숙자譯	2002.1.23	여자의 새된 목소리
⑲김 채수譯	2002.2.22	여자의 날카로운 목소리
⑳서 기원譯	2002.8.30	여자의 새된 목소리

いる。そして葉子は、駒子にあずけられた結び文を持って、島村の部屋に文使いに來ている場面である。先ほど檢討したのは駒子の「金切聲」だったとしたら、傍線部にある「女の金切聲」のほうは誰の聲であるか定かではない。

「今日は來れないわよ、多分。地の人の宴會だから。」と、その夜も駒子は島村の部屋へ寄つて行くと、やがて大廣間に太鼓が入つて女の金切聲も聞えてき來たが、その騷々しさの最中に思ひがけない近くから、澄み通つた聲で、
「御免下さい、御免下さい。」と、葉子が呼んでゐた。

(傍線引用者、以下同様)。

譯のほうでは原文の「女」を、複數とみて<여자들女達>といっているのが⑤・⑦・⑫・⑬・⑯の五例がある。原文同樣に<여자女>といっているのが、①・②・③・④・⑥・⑧・⑨・⑩・⑪・⑭・⑮・⑰・⑱・⑲・⑳の十五例がみられる。

宴會であることを考えると複數でもよいと思うのだが、原文に忠實しているのは<여자女>のほうではなかろうか。このときに使われている聲もしくは音を性質別に分類してみると、五つのパターンにわけられる。第一のパターンは、<높은 高い>という表現で六例みられるのであるが、なかでも<높은 노랫소리 高い歌聲>と<노랫소리 歌聲>を追加している譯が①・②・⑦・⑧・⑩の四例と<노랫가락 歌の調べ>という表現が③の一例にある。ここで、譯されている<노랫소리歌聲>と<노랫가락 歌の調べ>というのは、「太鼓」が部屋に入ったことから生まれた音の表現ではないかと思われる。

第二のパターンは、<금속성 金屬性>のみ表現されていて<목소리 聲>もしくは<소리 音>が省かれているのが④・⑥の二例がある。また、⑪に<날카로운 쇳소리 鋭い鐵の音>が一例みられる。これら三例は、音そのものの性質を表現しているに過ぎないのではなかろうか。

第三のパターンは、<날카로운 목소리　鋭い聲>⑨・⑮・⑰・⑲(四例)。

第四のパターンは、<째지는 듯한 새된 목소리　裂けるような甲高い聲>とするものであって⑭に一例があるが、その情景を表現しようと思ったか、言葉の追加がみられる。原文同樣の<새된 목소리 甲高い聲>が⑤・⑬・⑱・⑳(四例)。

第五のパターンは、<고성　高聲>⑯(一例)と<톤 높은 목소리 トン高い聲>⑫(一例)。

三.「さん」と「ちやん」

今回『雪國』翻譯本の比較・檢討を通して明らかになったのが、特に「さん」と「ちやん」の使い分に表記の亂れが目立つ点であった。「ちやん」というのは「さん」よりも打ち碎けた言い方で內輪の人に使うのが一般的であるという。辭典的な使いわけでは翻譯になんの問題もない。しかし、その意味だけに止まらないところに『雪國』の魅力があるのではなかろうか。冒頭、葉子が驛長を呼び止めて弟のことを賴むとき、「驛長さん」の「さん」が「さあん」と、「高い響きのまま夜の雪から木魂して來さうだつた」というときの澄んだ聲が、音を伸ばす强調表現を使って作品には描かれている。この葉子の呼びかけに答えるようにして、驛長は葉子に「さん」付けをして、「葉子さん」と呼んでいる。このような「さあん」と「さん」の使い分けが翻譯の中でも行なわれているのであろうか。六つのパターンに分けて、檢討してみる。

> 向側の座席から娘が立つて來て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷氣が流れこんだ。娘は窓いつぱいに乘り出して、遠くへ叫ぶやうに、

「驛長さあん、驛長さあん。」…(中略)…
「ああ、葉子さんぢやないか。お歸りかい。また寒くなつたよ。」

第一のパターンは、夜雪の中での葉子の聲が①・②では<역장님―、역장님― 驛長さまー、驛長さまー>と⑩では<역장니임―、역장님― 驛長さまあー、驛長さまー>といって音をのばす强調表現をしている。これらの例には、雪の中での響いている聲の譯が描かれているのである。また驛長が葉子を呼ぶときには<요우코씨 葉子氏>とされていて、韓國では<씨 氏>という言葉は主に姓や名前の後に付く語として一般的であるため原作同樣といえよう。

第二のパターンは、③・⑦の譯には<역장님、역장님― 驛長さま、驛長さまー>といって、韓國語の表現でも二回伸ばさないといけないところが一回だけにされている。原作の「葉子さん」の言葉は、韓國語で③<요우코상 葉子さん>といって日本語の<상 さん>がそのまま使われている。韓國語にも名前の後に付く<씨 氏>、<양 孃>などの敬称があるから、日本語の<상 さん>を使うのは一般的ではない。⑤・⑬の譯も葉子のことをいうとき、同じく日本語の<상 さん>がそのまま使われている。しかし、⑦では<요우코 葉子>のみである。

第三のパターンは、④・⑨では<역장니임、역장니임 驛長さまあ、驛長さまあ>、⑤・⑮では<역장니임！、역장니임！ 驛長さまあ！、驛長さまあ！>、⑰では<역장니임、역장니임！ 驛長さまあ、驛長さまあ！>と表現されているように原文に忠實である。がしかし、「葉子さん」に關しては<요우코 葉子>という名前だけがあって、敬称が使われていないため、<요우코>という名前だけでは作品が描こうとするのが充分に表現できないのではないだろうか。それに、原文の中でも驛長は「葉子さん」と呼んでいるから、「さん」という敬称の表記を生かした譯のほうがいいと思われる。そのような例が、④・⑨・⑮・⑰の譯などに見られる。日本と同樣韓國においても敬称は重要である。小さいことであるかも知れないが『雪國』という作品を讀む場合、見逃してはならないことであろう。

第四のパターンは、英韓對譯である⑥の譯に、原文の「驛長さあん、驛長さあん。」という葉子の呼び聲が譯されていない。暗い夜、雪の中で響いている葉子の聲が削除されているということは、作品の背景を想像しながら讀んでいる讀者のことを考えると見落としてはならない表現の一つではないかと思う。そのうえ、「葉子」に對しても敬称の表現である<씨 氏>、<양 孃>はもちろんながら<상 さん>さえ見當たらず、<요우코 葉子>という名前のみ表記されている。

第五のパターンは、⑧の譯に<역장님、역장님 驛長さま、驛長さま>といって音の强調表現がない。⑪と⑯には<역장님！ 역장님！ 驛長さま！驛長さま！>という呼びかけの記号<！>のみである。これら三例には、葉子にも敬称がない<요우코 葉子>という名前でしか表記されていない。

第六のパターンは、⑫・⑬・⑳の譯に、葉子の<역장님！역장님！ 驛長さま！驛長さま！>という呼び聲には、<！>を用いて表現している。韓國語では人の名前の後に<！>を使って呼

びかけの意味を表わす場合もあるが、相手の注意をこちらに向けさせるときに使うのが多い。葉子には<요우코양 葉子孃>(⑫・⑳)と言って韓國で一般的に若い娘の名前の後によく付く<양孃>という表現が見當たる。日本で一般的に名前の後に付く「さん」と同様であるが、韓國語の<양 孃>は女性だけに使うのが違うのである。續いて、⑭の譯も葉子を<요우코양 葉子孃>と言って表記しているし、雪國の中での葉子の呼び聲も<역장니임、역장니임！ 驛長さまあ、驛長さまあ！>といって雪の中に吸い込まれるように表現がされている⑱・⑲の譯にも<요우코양 葉子孃>と表現されている。しかし驛長に對しては⑱の譯が<역장님、역장님—驛長さま、驛長さまー>と、⑲の譯が<역장님、역장님… 驛長さま、驛長さま…>いうふうに<—>と<…>の記号を用いて一回のみ原文の「驛長さあん」という表現が譯されている。

以上の檢討からわかるように、夜雪の中での情景を意識したうえ、響いているはずの葉子の聲を韓國語で表そうとする姿勢はあるものの、「葉子」の後に付く「さん」の敬称がないのが八例見られる。このような例が、駒子が醉って島村の泊っている部屋を訪ねて來たときにも見られるのである。「島村さあん、島村さあん。」と、甲高く叫んだ。「ああ、見えない。島村さあん。」と、深夜宿屋中に響いている駒子の「金切聲」は、島村を求める切實な氣持ちが表現されている部分である。この聲はどのように翻譯されているのであろうか。駒子が島村を呼ぶときの名前の後に付く敬称別に、三つのパターンにわけて分析してみることにする。

第一のパターンは、駒子が島村を<선생님　先生様>もしくは<선생　先生>という敬称を付けて呼んでいる。

<시마무라선생님　시마무라선생님　島村先生様、島村先生様>

：①・③　・⑩(三例)。

<시마무라선생　시마무라선생 島村先生、島村先生>

：⑧(一例)。

<시마무라선생님　시마무라선생님… 島村先生様、島村先生様…>

：⑦(一例)。

<시마무라선생님　시마무라선생님！ 島村先生様、島村先生様！>

：②(一例)。

前述したように韓國語の<님>は日本語の「様」と同様の意味として、その相手を尊敬する意味が込められているため、男女關係に使用するのは不自然であると思う。最初から<선생님 先生様>という敬称で呼ぶと、讀者はこれから展開されていく二人の男女關係を想像するのには無理が生じてしまう。このときの駒子の聲には、島村を求めている切實な思いが込められているはずである。<선생님 先生様>という言葉の後に<……>か<—>で表しているため、<선생님 先生様>を「さあん」のように伸ばして呼べないのがこの翻譯の問題ではないかと思う。しかし、例外的に⑧の譯には島村の名前の後に<선생 先生>が付いている。日本でいう教授・教師・医者などの特定職業の人々につけられる敬称と違って、韓國においては誰もが氣やすく

呼び交わす言葉のひとつである。だとしても、駒子の職業上、島村に對して氣輕に名前の後に<선생 先生>と付けて呼べることでもない。

第二のパターンは、駒子が島村を<씨 氏>という敬称を付けて呼んでいる。

<시마무라씨、시마무라씨　島村氏、島村氏>

：⑨・⑲(二例)。

<시마무라씨이—、시마무라씨이……　島村氏—、島村氏……>

：⑫(一例)。

<시마무라씨！시마무라씨！　島村氏！島村氏！>

：⑪・⑮・⑯(三例)。

<시마무라씨、시마무라씨　島村氏、島村氏—>

：⑱(一例)。

<시마무라씨、시마무라씨！　島村氏、島村氏！>

：④・⑥・⑰ (三例)。

先ほど驛長が葉子を呼ぶときに確認したように、<씨 氏>という言葉は韓國語の中では一般的に使われている敬称の表現なのである。しかしそれだけでは駒子の醉っている狀態が表現されてない。それが表現されているのは、⑫のみで他の翻譯には單純に島村を呼んでいることを表わしているに過ぎない。

第三のパターンは、駒子が島村を呼ぶとき日本語の<상　さん>という敬称を付けて呼んでいる場合である(日本語の<상さん>に關しては前述した驛長が呼んだ「葉子さん」のところを參照願いたい)。

<시마무라상！、시마무라상！　島村さん！、島村さん！>

：⑤・⑬(二例)。

<시마무라사앙시마무라사앙！　島村さあん、島村さあん！>

：⑭(一例)。

<시마무라상、시마무라상！　島村さん、島村さん！>

：⑳(一例)

これらの譯の中で、島村を求めている駒子の切實な氣持ちを一番よく表しているのが、⑭の譯ではないかと思う。二箇所において、<시마무라사앙、시마무라사앙 島村さあん、島村さあん>と言って<상　さん>が<사앙　さあん>と伸ばしているのが原作と同樣である。これら駒子の島村を呼ぶ聲には、深夜でしかも醉っている狀況を考えて、「女の裸の心が自分の男を呼ぶ聲」であることを念頭においた翻譯が必要である。そういったことが原文における「さあん」という表記にあるはずである。駒子と葉子の間での呼び方はどうであろうか。駒子が島村の部屋に泊った翌朝の出來事である。駒子が家へ電話をして賴んだ 着替えと長唄の本を持って來てくれた葉子との會話の中には、<상　さん>と<쨩　ちゃん>の使い分けがきちんとされている。「駒

ちやん、駒ちやん。」と、低くても澄み通る、あの葉子の美しい呼び聲が聞えた。「はい、御苦勞さま。」と、駒子は次の間の三疊へ立つて行つて、「葉子さんが來てくれたの？まあ、こんなにみんな、重かったのに。」「駒ちやん」と「葉子さん」に分けて檢討してみる。

第一のパターン、<고마쨩、고마쨩 駒ちゃん、駒ちゃん>

：①・⑤・⑩・⑫・⑬・⑭・⑰・⑲(八例)。

第二のパターン、<고마쨩、고마쨩 ！ 駒ちゃん、駒ちゃん！>

：②・③・⑦・⑱・⑳(五例)。

第三のパターン、<고마언니、고마언니 駒姉さん、駒姉さん>

：④・⑥(二例)。

第四のパターン、<고마코、고마코 駒子、駒子>

：⑧・⑨・⑪・⑮・⑯(五例)。

この場合、問題にしたいのは、第三のパターンにある<고마언니 駒姉さん>と第四のパターンにある<고마코 駒子>という譯なのである。これは作品を理解してないことによる翻譯の誤りではないだろうか。この二人の關係は、作品の中でも明らかになってないから不明なまま語られている。しかし、はっきりしたことは原作の中でも葉子は駒子を親しげに<고마언니 駒姉さん>とも、名前だけの<고마코 駒子>とも呼んではいけない關係であることである。次、駒子が葉子を呼ぶときにはどのような敬称を使って譯されているのであろうか。

第一のパターン、<요우쨩 葉ちゃん>

：① ・②・③・⑦・⑩(五例)。

第二のパターン、<요유코 葉子>

：④・⑥ ・⑧・⑨・⑪・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱(十例)。

第三のパターン、<요우코씨 葉子 氏>

：⑲(一例)。

第四のパターン、<요우코상 葉子 さん>

：⑤・⑫・⑬・⑳(四例)。

この場合、問題になるのは、駒子は葉子を原文の中でも「葉子さん」ときちんと呼んでいるし敬称の付いてない<요우코 葉子>という名前だけでは呼んだことがない。葉子の場合にも駒子と同様、第一のパターンにあるように<요우쨩 葉ちゃん>と第二のパターンにある名前だけの<요우코 葉子>と呼んではならない。このように、敬称というのはその國獨特の呼び方であるため、作品を讀み込んだ上で登場人物の關係を配慮した翻譯をしないと誤解を招くような結果を呼ぶ場合もあることを注意しなければならないと思う。作中人物の相互關係は讀めばわかることだから、丹念な讀みを怠ってはなら ないと思う。

次に、葉子と弟である佐一郎との呼び方をみてみよう。行男のお墓參りをしていた葉子を見

つけて、貨物列車の中から呼んでいる弟の聲である。

貨物列車が眞近を通つたのだ。「姉さあん。」と叫ぶ聲が、その荒々しい「姉さあん。」と叫ぶ聲が、その荒々しい響きのなかを流れて來た。黑い貨車の扉から、少年が帽子を振つてゐた。
「佐一郎う、佐一郎う。」と、葉子が呼んだ。

表―3

『雪國』	「姉さあん。」	「佐一郎う、佐一郎う。」
①김 용제譯	「언니이」	「사이찌로(佐一郎)、사이찌로오」
②박 경용譯	「누나。」	「사이찌로오(佐一郎)、사이찌로오-」
③고 우영譯	「누나。」	「사이찌로오(佐一郎)、사이찌로오-。」
④김 세환譯	「누나아!」	「사이찌로오、사이찌로오!」
⑤김 소운譯	「누나아。」	「사이찌로오、사이찌로오。」
⑥이 육정譯	「누나아!」	「사이찌로오、사이찌로오!」
⑦이 원용譯	「누나아-。」	「사이찌로오(佐一郎)、사이찌로오!」
⑧강　민譯	「누나」	「사이찌로오(佐一郎)、사이찌로오」
⑨하 근찬譯	“누나-.”	“사이치로오(佐一郎)、사이치로오.”
⑩도서출판 靑化譯	「누나」	「사이찌로오、사이찌로오」
⑪맹 후빈譯	「누나아!」	「사이찌로오、사이찌로오!」
⑫반 광식譯	“누나아.”	“사이치로오(佐一郎)、사이치로오.”
⑬한 영순譯	「누나。」	「사이찌로오(佐一郎)、사이찌로오」
⑭장 경룡譯	“누나아”	“사이치로(佐一郎)、사이치로”
⑮김 진욱譯	“누나아!”	“사이치로오(佐一郎)、사이치로오!”
⑯유 승휴譯	“누나!”	“사이치로、사이치로!”
⑰다락원출판부譯	“누나-!”	“사이치로、사이치로-!”
⑱유 숙자譯	「누나-!」	「사이치로(佐一郎)、사이치로-!」
⑲김 채수譯	“누나”	“사이치로、사이치로.”
⑳서 기원譯	“누나!”	“사이치로! 사이치로!”

表―3にあるように、佐一郎が葉子を呼ぶ「姉さあん。」は翻譯の中で⑲の譯以外は表現されているのである。ここでいう<누나　ヌナ>というのは、弟に當る人が自分の姉を呼ぶときに使う韓國語の言葉である。しかし①の譯はなぜか<언니　オンニィ>という妹に當る人が自分の姉を呼ぶときに使う言葉を使っている。翻譯のミスとしか思えないことであろう。葉子の場合、弟を呼んでいる「佐一郎う、佐一郎う。」という表現は、譯の中に忠實に表現されている。その貨物列車は止まることなく通過してしまう。その瞬間互いを發見した喜びで姉と弟は呼び合っている情景を理解した結果による譯であると思われる。

四. おわりに

以上、韓國語版『雪國』を檢討してみた結果、あってはならないことがあるとしたら誤譯と削除ではないかと思う。『雪國』と仏譯を比較した中山眞彦論5)の中に、次のような文章がある。

> 先入觀こそは翻譯者のもっとも警戒すべきものであり、母國語という無意識の先入觀の危險を反省し得ないような翻譯者は、そもそも翻譯者の名に値しない。しかし、その反省の結果が、母國語本來の成り立ちを解体し、それをいわば言語的素材の狀態にまで還元した果てに、原文(外國語)との接触という異質体驗を盛るべき器として、ひとつの新しい言語の形にふたたび作りなおすということは、神ならぬ人間のよくすることではなかろう。翻譯者は、すでにひとつの体系として成立している母國語の外に出ることが出來ないという宿命を背負っているのである。

心すべきことからであると思う。

【注】

3) 釜山廣域市立市民図書館 所藏本(二十冊)

1. 『日本文學選集5 雪國』(川端康成著 김용제譯 青雲社 1961.2.30)
2. 『86 年度 노벨文學賞受賞作 雪國 外』(川端康成著 박경훈譯 東西文化院 1968.10.25)
3. 『雪國』(川端康成著 고우영譯 康友出版社 1968.10.25)
4. 『川端康成全集1 中篇小說 雪國外』(川端康成著 김세환譯 新丘文化社 1969 ※月日表記無い。)
5. 『世界文學大全集8雪國外5篇』(川端康成著 김소운外3名譯 同和出版公社1970.1.10)
6. 『英韓對譯 雪國』(川端康成著E.G사이덴 스티커英譯 이육정譯註 德文出版社 1979 ※月日表記無い。)
7. 『世界代表問題作家全集10雪國』(川端康成著 이원용譯 藝潮社 1981.4.15)
8. 『日本名作短篇選集3 雪國・山の音』(川端康成著 강 민譯 敎育出版公社 1982.2.15)
9. 『學園世界文學 雪國 外』(川端康成著 하근찬譯 學園社 1983.11.15)
10. 『노벨文學賞全集 雪國』(川端康成著 図書出版 青化譯 1984.2.28)
11. 『bear book39 설국』(川端康成著 맹후빈譯 文章社 1986.9.20)
12. 『世界名作48 설국・천우학』(川端康成著 반광식譯 一信書籍出版社 1993.8)
13. 『雪國・羅生門・敦煌』(川端康成著・芥川龍之介著：한영순譯/井上靖：최준호譯 図書出版

---

5) 中山眞彦「救濟としての文學ー『雪國』とその仏譯についてー」(「現代文學」29号、1984・6) p.32

마당 1993.7.1)

14. 『雪國』(川端康成著 장경룡譯 文藝出版社 1999.9.10)
15. 『雪國・千羽鶴』(川端康成著 김진욱譯 汎友社 1999.12.20)
16. 『雪國』(川端康成著 유승휴譯 青木社 2001.4.30)
17. 『日本文學日韓對譯文庫 雪國』((上)・(下)川端康成著 다락원출판부譯註 다락원 2001.9.1)
18. 『世界文學全集16 설국』(川端康成著유숙자譯 民音社 2002.1.23)
19. 『韓日對譯版 설국』(川端康成著김채수譯 과정학사 2002.2.22)
20. 『설국』(川端康成著서기원譯 青林出版 2002.8.30)

【參考文獻】

· 崔 炳璉『言葉の比較文化 韓國語と日本語』(講談社 1985.6.10)

KCI

要 旨

韓國における日本文化の開放は、一九九八年十月以降、段階的に實施され、二〇〇四年一月一日の第四次開放までに、日本の出版物の韓國市場での流通はほぼ完全に自由化された。しかし、川端康成の作品が韓國の讀者に讀まれるようになったのは、それ以前、彼がノーベル文學賞を受賞した一九六八年からであった。韓國と日本は同じ漢字文化圈に屬し、兩者は語順も似ているため、韓國では日本語に興味を持つ人は多い。がしかし、同じ漢字語を使用してはいるものの發音や同一語の意味には差異がある。そこで翻譯本の問題点の一つとして指摘されるのが、讀者が目にする韓國語版が原作に沿った形で翻譯されているかどうかという点である。それらのことを比較·檢討し、指摘する人は今日ほぼ皆無なのが現狀である。川端康成の『雪國』が韓國の讀者に讀まれるようになったのは、ノーベル文學賞を受賞された時からであった。韓國の國會図書館と國立中央図書館に所藏されている資料によると、韓國語版『雪國』は七十一種類も刊行されているのであるが、翻譯者によってその言葉の表現はさまざまであり、なかには内容の誤りだけでなく削除も目に付く。翻譯の問題点の一つは、讀者が目にする韓國語版『雪國』が内容通りに翻譯されているかどうかなのであろう。本論では釜山廣域市立図書館に所藏されている翻譯書を對象にし、同じ翻譯者のものを除いた二十冊をもとに、翻譯の言葉を中心に問題点を指摘した。

キーワード：韓國語版『雪國』、翻譯書、<聽覺>表現、韓國語譯、飜譯の言葉、飜譯者

투　　고	2005. 8. 31
1차 심사	2005. 9. 10
2차 심사	2005. 10. 1

住　所：(621-911) 경상남도 김해시 삼방동 692 화인아파트 110-1206호
電　話：010-6677-8143
e-mail：pinky0209@hanmail.net